

2025

韓国訪問研修 実施報告書

2025年10月30日（木）
～ 11月 1日（土）



次世代の九州がんプロ養成プラン

TRAINING PROGRAM FOR NEXT-GENERATION HEALTH PROFESSIONALS
WITH CANCER CARE IN KYUSHU

令和7年度 韓国訪問研修実施報告書 目次

タイトル	ページ
1. ご挨拶	2
2. 研修概要・参加者名簿	3
3. スケジュール	4
4. 研修報告	6
九州大学大学院医学研究院 連携腫瘍学分野 助教 磯部 大地	6
九州大学大学院医学研究院 病態修復内科学 北園 貴文	7
九州大学大学院医学研究院 病態修復内科学 草野 亘	9
長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 臨床腫瘍学分野 芦澤 和人	11
長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 朝野 寛視	12
大分大学医学部医学系研究科 消化器小児外科学講座 長澤 由依子	13
琉球大学医学部保健学科 病態検査学講座血液免疫検査学分野 福島 卓也	15
5. 研修写真	16

1. ご挨拶

九州大学大学院医学研究院 連携腫瘍学分野 教授 馬場 英司

(九州大学コーディネーター、幹事コーディネーター)

文部科学省「次世代のがんプロフェッショナル養成プラン」の事業である「次世代の九州がんプロ養成プラン」では、その目標として掲げているがん医療専門人材の育成のために、海外大学・医療機関との連携を強め、国際的なより広い視野を持つための研修を実施しています。九州から距離的にも近い韓国の首都ソウルには、同国のがん診療、研究、教育を担う大規模な施設が集中しており、意義深い訪問研修が可能であることから、2013年より九州がんプロ事業として継続してきました。国際学会にて各国の研究者と接し学ぶことは重要な経験ですが、海外の大学・医療機関の診療、研究そして教育の実際の状況を現地にて見聞することにはまた別の価値があると考えられます。日本とは異なる環境下で繰り広げられるこれらの様子は、私達の大学での日々の活動と容易に比較でき、そのあり方を再考するための豊富な情報を与えてくれます。これまで数多くの九州がんプロ履修生がこの訪問研修に参加し、確かな国際的な視点を身につけて、現在それぞれのがん関連の専門分野で活躍しています。

本年度の訪問研修では、初めて日程を2泊に延長し、ソウル市内の複数の施設を訪問することといたしました。2025年10月30日には延世大学校医科大学腫瘍内科講座を、そして10月31日にはソウル・アサンメディカルセンター腫瘍学講座を訪問し、それぞれの施設の活動状況を学び、同時に九州がんプロの参画大学で進めている最新の研究成果を報告しました。いずれも多診療科の医師、メディカルスタッフが参加し、基礎研究から臨床開発、そして集学的医療まで、がんが有する幅広い課題に対する多彩な議論が行われ、密度の濃い内容であったと思います。また10月31日には延世大学にて開催されていた30th International Symposium of Yonsei Song-Dang Institute for Cancer Researchにも出席し、分子標的薬の登場からプレジジョン医療に至るがん治療の再定義について議論に参加することができました。

ソウルの各施設の方々が九州がんプロの活動を理解し、特に継続して訪問研修に協力下さっていることは、本事業において両国の出席者に共に実りがあるからと信じています。今回の韓国訪問研修は、延世大学のSun Young Rha教授、アサンメディカルセンターのMin-hee Ryu教授の温かい御支援のお陰で実施可能となりましたことを心より感謝申し上げます。また九州がんプロの各大学からご参加頂いた教員、履修生、そして研修の準備を行って頂いた事務担当者の方々にも御礼を申し上げます。本事業が益々継続、発展し、がん医療の専門家の育成に役立つことを願っています。

2. 研修概要・参加者名簿

【目的・背景】

韓国のがん医療を実地に見学し、日韓の実地臨床事情の差異、及び臨床研究の発展する素地と臨床研究を行うための体制について議論する。なお、本研修は、がんプロ大学院生の教育、および担当教員のFDを兼ねて実施する。

【実施日】 令和7(2025)年10月30日(木)～11月1日(土)

【訪問先】 1日目:延世大学セブランス病院
2日目:(午前)延世大学医学部 (午後)アサン医療センター

【宿泊先】 GLAD MAPO(グラッド麻浦)
92, Mapo-daero, Mapo-gu, Seoul, Republic of Korea

【参加者名簿】

No	大学	氏名	職種	身分
1	九州大学	馬場 英司	医師	教授
2		磯部 大地	医師	助教
3		北園 貴史	医師	大学院生
4		草野 亘	医師	大学院生
5	長崎大学	芦澤 和人	医師	教授
6		朝野 寛視	医師	助手
7	大分大学	長澤 由依子	医師	医員
8	琉球大学	福島 卓也	医師	教授

Visit to Yonsei University College of Medicine

October 30, 15:00–

Presentations

- 30 minutes – An overview of the Yonsei Cancer Center (YCC), the Gastric Cancer Clinic, and current research activities in gastric cancer at YCC.
 - 30 minutes – Introduction of the Kyushu GanPro consortium and presentations on research activities conducted at participating institutions.
 - Overview of Kyushu GanPro (Dr. Eishi Baba)
 - Introduction of participating institutions (by respective representatives)
 - Brief presentation of ongoing research projects (Dr. Wataru Kusano)
 - 30 minutes – Open discussion to exchange views and explore potential opportunities for future collaboration.
-

Attendance at a Symposium

Yonsei University College of Medicine

October 31, 9:00–11:40

The 30th International Symposium of the Yonsei Song-Dang Institute for Cancer Research

“Redefining Cancer Treatment: From Molecular Targets to Precision Cancer Therapy”

Venue: ABMRC, New ILHAN Memorial Hall

Visit to Asan Medical Center

October 31, 14:00–

Research Presentations

Presentations by Asan Medical Center

1. Mechanisms of primary and acquired resistance to first-line immune checkpoint inhibitor (ICI) plus chemotherapy in gastric cancer (Dr. Hyung-Don Kim)
2. Clinical outcomes of GIST patients with primary *KIT* exon 13 or 17 mutations treated with first-line imatinib (Dr. Jaewon Hyung)
3. Predictive value of homologous recombination-related gene mutations in survival outcomes of first-line nivolumab plus chemotherapy for gastric cancer (Dr. Yuna Lee)
4. Association between the presence of malignant ascites and survival outcomes in gastric cancer patients treated with nivolumab plus chemotherapy (Dr. Yuna Lee)

Presentations by the Kyushu GanPro Delegation

1. Intraoperative Narrow-Band Imaging Predicts Invasion Depth in Gallbladder Cancer (Dr. Yuiko Nagasawa)
2. Determinants of TLS maturation in gastric cancer: A perspective beyond immune cell composition (Dr. Wataru Kusano)
3. Research activities based on the Okinawa ATL/HTLV-1 Bioinformation Bank (Dr. Takuya Fukushima)

Participants

- **Eishi Baba, MD, PhD** — Professor, Department of Comprehensive Oncology, Kyushu University
- **Taichi Isobe, MD, PhD** — Assistant Professor, Department of Comprehensive Oncology, Kyushu University
- **Takafumi Kitazono, MD** — Research Fellow, Department of Medicine and Biosystemic Science, Kyushu University
- **Wataru Kusano, MD** — Research Fellow, Department of Medicine and Biosystemic Science, Kyushu University
- **Kazuto Ashizawa, MD, PhD** — Professor, Department of Clinical Oncology, Nagasaki University
- **Hiromi Tomono, MD** — Research Associate, Department of Respiratory Medicine, Nagasaki University
- **Yuiko Nagasawa, MD** — Clinical Fellow, Department of Gastroenterological and Pediatric Surgery, Oita University
- **Takuya Fukushima, MD, PhD** — Laboratory of Hematoimmunology, University of the Ryukyus

4. 研修報告

九州大学大学院医学研究院 連携腫瘍学分野 助教 磯部 大地

2025年10月30日(木)～31日(金)にかけて、九州がんプロフェッショナル養成プランの一環として、韓国・ソウルのYonsei University Cancer CenterおよびAsan Medical Centerを訪問した。本事業は、若手がん医療人の国際的視野の拡大および実践的な研究交流を目的とし、訪問を通じた人的ネットワーク形成を継続している。

今回の訪問には、九州大学、長崎大学、大分大学、琉球大学から8名の医師・研究者が参加した。企画にあたっては、筆者が事前にYonsei University Cancer CenterのMinkyu Jung先生、Asan Medical CenterのHyung-Dom Kim先生と複数回にわたり連絡を取り、プログラムの調整・構築を行った。

10月30日には、Yonsei University Cancer CenterにてSun-Young Rha先生およびMinkyu Jung先生のご案内のもと、施設見学および研究ミーティングが行われた。Jung先生より、Yonsei Universityにおける胃がん診療の現状と臨床試験の成果について非常に充実した講義があり、参加者一同大いに刺激を受けた。各診療科や大きな外来化学療法室の外来に加え、重粒子線治療施設の見学も行った。またYonsei Universityには通常の診療科に加え、Scar Laser and Plastic Surgery Center、Cancer Prevention Center、Cancer Education Centerといったがん治療を支える支援施設が多くあった。医療機能と患者支援の融合という観点から非常に先進的な取り組みがなされていることを実感した。また、院内のいたるところに配置されていた患者向けの啓発展示も印象的であり、患者中心の医療に対する姿勢が随所に表れていた。

10月31日には、Asan Medical CenterにてMin-Hee Ryu先生およびHyung-Dom Kim先生の主催のもと、「Joint Symposium on Cancer Treatment and Research」が開催された。会場にはAsan Medical Centerの若手医師も多く参加し、韓国側からも非常にレベルの高い研究発表が続いた。Kim先生の胃がんのマルチオミクス解析は国際的に見ても最前線の内容であり、今後の臨床応用が強く期待される成果であった。また、Asan側の若手医師による発表も内容・プレゼンテーション共に優れており、韓国の若手育成の質の高さを感じた。日本側からは以下の3名が発表を行い、特に草野亘先生の研究内容についてはKim先生から個別に助言をいただく機会もあり、今後の研究の方向性や改良のヒントを得る貴重な時間となった。またAsan Medical CenterよりGISTに関する変異解析と薬剤治療効果に関する共同研究の可能性も提案された。

また、今回の交流を踏まえ、来年度以降は日本側での受け入れ交流も視野に入れ、具体的な準備を進めていく予定である。

今回の訪問を通じて、韓国側との信頼関係がより強固なものとなり、若手研究者を中心とした実質的な国際交流の第一歩が築かれた。今後もこの取り組みを継続・発展させるべく、九州がんプロ内外の関係者と連携を強めていきたい。

令和 7 年 10 月 30 日から 11 月 1 日の 3 日間、九州がんプロ事業の一環として開催された韓国訪問研修に参加した。私にとって、日本国外の医療現場を実際に見るのはこれが初めての機会であり、日頃日本で当たり前のものでありながら受け止めている診療体制や病院の構造を、一步引いた視点から見直す貴重な契機となった。

1 日目は延世大学・Severance 病院にて施設見学を行った。病院本館は地下 6 階から地上 15 階に至る巨大な建物であり、複数の大規模施設が連なる広大な敷地にまず圧倒された。1 階の売店エリアにはコンビニエンスストアのみならず、カフェやファストフード店など多様な飲食店が並んでおり、病院内であることを忘れそうになるほど洗練された空間であった。診察や検査で訪れた患者が、ただ「病院に来る」というよりは、ひとつの複合施設に立ち寄るような感覚で過ごせるよう意識されているように感じられた。売店エリアに限らず、病院群全体が意匠を凝らしたデザインとなっていた点も印象的であった。特にエントランスにそびえる木目調の大型構造物はノアの方舟をモチーフにしているとのことで、一際目を引くシンボルとして印象に残った。本病院は 1885 年にアメリカより派遣された H.N. Allen 博士によって設立された韓国初の西洋式病院であり、その歴史的背景を反映するように、随所にキリスト教文化を感じさせる要素がさりげなく配置されていた。

各科外来の空間デザインも画一的ではなく、それぞれの診療科の特徴や主な患者層に応じた工夫が凝らされていた。例えば小児科外来は曲線を主体としたカラフルな装飾によって緊張感を和らげるような雰囲気をつくり出しており、婦人科外来は暖色系の照明を中心とした落ち着いた空間デザインによって、安心して診察を受けられるよう配慮されていた。患者がどう感じるかを丁寧に想像しながら環境が整備されていることが伝わり、日本の医療機関における今後の環境整備を考える上でも多くの示唆を得た。さらに、案内用の自動運転ロボットや、床面に方向表示を投影するプロジェクターなど、日本の病院ではあまり見かけない設備も印象に残った。これらの空間づくりや技術の活用は、患者が病院に抱く心理的ハードルを下げるとともに、「ここに来れば必要な医療をきちんと受けられる」という安心感につながっているのだろうと考えさせられた。

特に圧巻であったのは外来化学療法室で、その病床数は 150 に及ぶとのことであった。それでもなおベッドが不足するため、廊下には増設されたとみられるリクライニングチェアが並んでおり、同院が極めて多くの患者を受け入れていることがうかがえた。単に「大規模である」という感想を超えて、これほどまでの患者数に対応しながら安全に化学療法を提供するためには、医療スタッフのマンパワーだけでなく、スケジュール管理や薬剤投与のオペレーションを支える情報システムなど、多層的な仕組みづくりが必要であることを実感した。

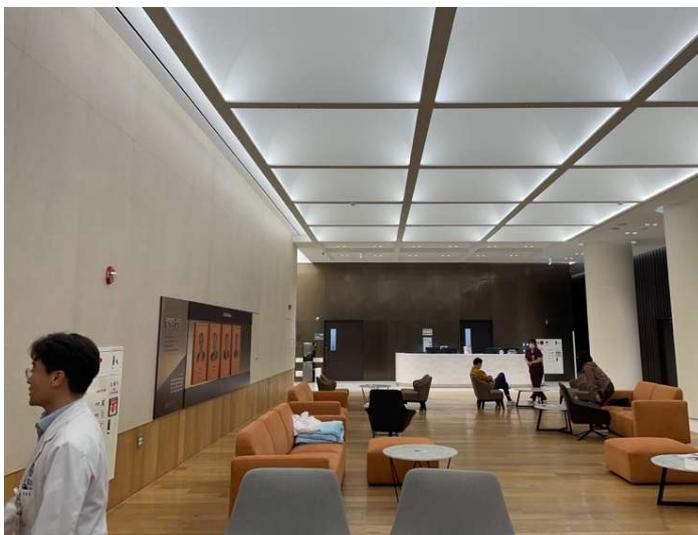
施設見学の後には、がん化学療法における日韓の診療体制や教育内容の違い・共通点について意見交換を行った。同院は年間 240 万人の外来患者を受け入れており、そのうち 80 万人ががんセンター外来であるとの説明があり、先ほど見学した化学療法室の規模とも整合する圧倒的な患者数で

あった。また、年間約 400 件の臨床試験に参加しているとのことで、韓国における医療の中核としての役割を担っていることがよく理解できた。九大から共に訪問した草野先生のバイオインフォマティクス研究に対しても鋭い質問や提案が相次ぎ、臨床のみならず医療全体に対する深い造詣を持つ先生方であることを実感した。

2 日目はアサンメディカルセンターを訪問し、日韓それぞれの施設における臨床研究・基礎研究の発表と活発な議論が行われた。特に印象的であったのは、臨床研究に組み込むことのできる症例数の多さである。希少がんの一つである GIST において、稀な KIT exon13 または 17 変異を有する患者に対する分子標的治療の効果を検討するため、同院単独で 1500 人を超える NET 患者の遺伝子解析を行っていた。その中から対象となる変異を持つ患者は 30 人未満であり、巨大なコホートを背景にした研究基盤があればこそ可能なアプローチであり、希少がん研究の現実的なスケール感を学ぶことができた。

胃癌における免疫チェックポイント阻害薬の耐性機序を探る基礎研究では、多数の患者由来検体を用い、snRNAseq・Visium・PBMC scRNAseq・tissue Xenium など多彩なモダリティを駆使した解析が紹介された。施設規模の大きさはもちろんであるが、研究を推進する個々の力にも圧倒され、自身も一層努力しなければならないと身が引き締まる思いであった。同年代の先生方が上司の指導を受けながら着実に研究成果を積み重ねている姿を目の当たりにし、研究者としての姿勢や時間の使い方についても学ぶところが多かった。

1 日目・2 日目ともに、交流後には夕食会が設けられ、美味しい料理をいただきながら国際的な医療事情について意見交換を行うとともに、私生活の話など他愛もない会話も交わし、親睦を深めることができた。フォーマルな場での議論だけでなく、リラックスした雰囲気の中で互いのバックグラウンドや価値観に触れられた。今後再び交流の機会が訪れた際には、自国および自施設、そして自分自身の臨床・研究経験について胸を張って語れるよう、日々の診療と研究において一つひとつの経験を大切に積み重ねていきたい。



(延世大学病院 重粒子線治療センター)



(延世大学病院 エントランス「ノアの方船」)

昨年度に引き続き韓国 Asan Medical Center (AMC) を訪問し、今年度は延世大学校 (Severance Hospital) の視察も行った。AMC は病床数 2,736 床、1 日外来患者数約 14,000 人 という規模を有するが、特筆すべきはその圧倒的な「患者リクルート能力」にある。この豊富な臨床検体を背景に、ゲノムのみならずトランスクリプトームやプロテオームを統合した「マルチオミクス解析」を臨床試験に組み込むトランスレーショナルリサーチ (TR) が、驚異的なスピードで展開されている。本研修では、巨大なバイオバンクと解析基盤を持つ同センターにおいて、現在私が取り組んでいる空間トランスクリプトミクス (Spatial Transcriptomics) がどのように TR へ実装されているのか、その現状を学び、自身の研究の方向性を再確認することを目的とした。

合同シンポジウムにおいて、私は『Xenium In Situ を用いた胃癌における三次リンパ様構造 (TLS) の成熟度評価』について発表した。現地で最も圧倒されたのは、組織的なデータ産生能力の高さと、それを支える徹底した分業体制である。同センターでは、臨床医 (MD) は検体提供と臨床的解釈に注力し、解析実務は専門のインフォマティシャンと密に連携 (ペアリング) して行う体制が確立されていた。多忙な臨床医が研究の質と速度を維持するためには、この分業こそが最適解なのだと言感させられた。対して、私は臨床と解析の双方を一人で行うスタイルをとっている。今回提示した「TLS の微細な定義」は、臨床医自身が解析データに潜り込むことで初めて見出せた成果ではあるが、同時に、このスタイルで処理できるデータ量や時間には限界があることも再認識した。大規模解析に適した彼らのシステムと、詳細な仮説生成に適した我々のアプローチ、それぞれの利点と課題を客観視できたことは大きな収穫であった。

本研修を通じ、AMC の TR 研究のスケールとスピードに圧倒されると同時に、臨床試験の成否を科学的に説明できる TR 研究の重要性を改めて実感した。彼らの効率的なシステムから学びつつ、独自の視点でどのような貢献ができるか、今後の共同研究の可能性も含めて模索していきたい。貴重な機会を与えてくださった馬場英司教授、Min-Hee Ryu 教授、九州がんプロの皆様に深謝いたします。

Title: Integrating Spatial Transcriptomics with Translational Research: Insights from Asan Medical Center and Yonsei University

Name: Wataru Kusano, M.D. Affiliation: Graduate Student, Department of Hematology and Oncology, Kyushu University

Abstract: This year, I visited Asan Medical Center (AMC) and Yonsei University to learn from Korea's leading translational research (TR) centers. AMC is characterized not only by its massive scale (2,736 beds) but by its exceptional patient recruitment capability, which fuels rapid, large-scale multi-omics studies. In the joint symposium, I presented our findings on Tertiary Lymphoid Structures (TLS) in gastric cancer using Xenium In Situ. I was deeply impressed by their research framework, which employs a highly efficient division of labor between clinicians and bioinformaticians. Witnessing their speed and scale, I recognized that such a specialized partnership is likely the optimal solution

for sustaining advanced research in a high-volume clinical setting. In comparison, my approach integrates clinical oncology directly with bioinformatics analysis. While this single-role method has limitations in scalability and time efficiency, it proved valuable for the specific, deep characterization of tissue heterogeneity in this study. Through this visit, I learned the importance of balancing individual analytical depth with the efficiency of collaborative systems. I aim to use this insight to explore future collaborations that leverage their extensive resources. Finally, I would like to express my sincere gratitude to Prof. Eishi Baba, Prof. Min-Hee Ryu, and all the staff for this valuable opportunity.



アサン医療センターにて 草野巨先生

令和 7 年度九州がんプロ事業の一環で、ソウルの延世大学セブランス病院およびアサン医療センターへの海外研修に、当大学の朝野寛視助手(呼吸器内科、がんプロ)とともに参加致しました。二泊三日というスケジュールであり、初日に延世大学セブランス病院を訪問し、本院とは別棟の「がんセンター」の各部署を紹介して頂きました。長崎大学は 2011 年(第 1 期がんプロ)にがんプロ関係者の 6 名(医師 3 名、薬剤師 1 名、看護師 2 名)で、延世大学セブランス病院を訪問しており、当時は今回訪問した「がんセンター」を建設中でしたが、大規模な施設、がん種ごとの部署、充実したスタッフなどに再び驚いた次第です。また、ホテルのようなロビーを備えた重粒子線センターも見学しました。2 日目は、アサン医療センターを訪問しましたが、その受け入れ体制は以前同様、素晴らしく、またシンポジウムでは、消化器がんに関する最先端の研究内容が韓国と日本から発表され、大変有意義な研修となりました。

韓国が、がん診療をソウルに「集約化」していることは以前より認識していましたが、日本のがん医療では、韓国の大規模な施設、充実したスタッフなどをそのまま取り入れることは困難です。しかし、効率よく臨床・研究を行うシステム等のソフト面も充実していることはこれまでの訪問で確認しており、今後の日本のがん医療にいかにかけるかが重要だと思えます。

今回の海外研修を含めて、毎年研修を企画・運営頂いている馬場教授、磯部先生はじめ九州大学の関係者の皆様にお礼を申し上げます。今回研修に参加されたがんプロ大学院生、医療スタッフは沢山の刺激を受け、日本の医療を見つめ直す良い機会であったと思えます。九州の各大学から、医師のみならず多職種で研修に参加することで、九州がんプロの大学間連携がより一層強まることを期待しています。



延世大学セブランス病院にて 芦澤和人先生

このたび、九州大学の馬場教授の引率のもと、「がんプロフェッショナル養成プラン」の一環として、2025年10月30日に延世大学セベランス病院、翌31日にアサンメディカルセンターを訪問し、研修の機会をいただきました。

両施設はいずれも韓国・ソウルに所在し、韓国を代表する五大病院の一つとして知られています。その病院規模の大きさと患者数の多さに圧倒されました。

延世大学セベランス病院では、Jung Min Kyu 先生のご案内のもと施設見学を行いました。広大な敷地内には複数の専門施設があり、特に2014年に完成したがんセンターや、2023年に稼働を開始した韓国初の重粒子線治療センターを中心に見学しました。

その後のカンファレンスでは、Jung 先生より韓国における胃癌の現状と治療、延世大学の取り組みについてご講演いただき、続いて九州大学の草野先生から研究発表が行われ、活発な意見交換が行われました。

アサンメディカルセンターでは病院見学はありませんでしたが、エントランスは非常に広く、セキュリティや感染対策のためか、病棟に入る際に入場ゲートが設けられており、日本ではあまり見られない仕組みで印象的でした。シンポジウムでは、前日と同様に韓国および日本の研究者がそれぞれ研究内容を発表し、活発な討論が行われました。

両日ともシンポジウム後には懇親会を開いていただきました。Min 先生やアサンメディカルセンターの Jaewon Hyung 先生にお話を伺ったところ、外来診療では3時間で50～70名のがん患者を診察されているとのことで、その診療密度の高さに驚きました。

特に胃癌および悪性リンパ腫をご専門とされる Hyung 先生は、私と同年代でありながら、臨床業務の傍ら複数の臨床研究を主導されており、現在5～6本の自主臨床研究を進めているとのことでした。その精力的なご活躍に深く感銘を受けました。

また、韓国では高速鉄道 KTX の発達により、釜山からソウルまで約2時間で移動できることから、アサンメディカルセンターには韓国全体の約3分の1のリンパ腫患者が集約されていると伺いました。このような医療の集約化が進んでいることで、臨床研究における症例数の多さや、発表で示されていた膨大なデータ量にも納得がいきました。

今回の研修には、大学院生として九州大学の北園先生・草野先生、大分大学の長澤先生が参加されていました。先生方の研究内容や英語によるプレゼンテーション、現地研究者との積極的な意見交換を拝見し、自身の課題と今後の努力の方向性を改めて認識しました。

特に英語での質疑応答の場面では、国際的な場で研究を発信する力の重要性を強く実感しました。

今回の研修を通じて、医療システムの違いや研究の進め方、診療現場のスピード感など、多くの刺激と学びを得ることができました。この経験を糧に、今後は国内外の研究者と積極的に交流し、がん診療および研究の両面でさらに成長できるよう努めてまいります。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださいました先生方および関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。

この度、2025年10月30日から11月1日に開催された九州がんプロ韓国研修に参加し、韓国を代表するハイボリュームセンターである延世大学 Severance 病院およびアサン医療センターを訪問しました。

延世大学 Severance 病院では、施設全体の見学とともに、病院の歴史や組織体制についてお話を伺いました。Severance 病院は韓国で最初の近代的医療機関として創設され、長い歴史の中で国内外の医療発展に大きく寄与してきたとのことでした。院内にはがんセンターや研究棟が体系的に配置されており、診療・研究・教育が緊密に連携している様子が印象的でした。

アサン医療センターでは、シンポジウムに参加しました。韓国側の先生方からは、胃癌領域における臨床試験の最新知見について発表があり、日本からの視察団はそれぞれの所属大学で実施している基礎研究やトランスレーショナルリサーチの内容を紹介し、活発な意見交換が行われました。

韓国では医療資源が首都ソウルに集中しており、大規模施設における診療と研究が効率的に運営されている印象を受けました。集約されることにより、短期間で大規模な臨床試験が実施できる点は大きな強みであると感じました。一方、日本は人口が分散しており、地方でも手術や化学療法を受けることができ、医療へのアクセスの良さを実感しました。

今回の研修で最も印象的だったのは、診療科を越え、大学を越え、さらには国を越えて、自分と同世代の先生方がそれぞれの環境で努力を重ねている姿を見られたことです。私自身も発表やディスカッションを通じて、さらなる成長への意欲をかき立てられました。今後は今回の経験を糧に、研究成果を臨床応用へとつなげる視点をさらに磨き、国際的な研究交流の一翼を担えるよう一層精進したいと思います。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださった九州大学の馬場英司先生、延世大学 Severance 病院の Sun-Young Rha 先生、アサン医療センターの Min-Hee Ryu 先生をはじめ、がんプロ関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

Yuiko Nagasawa

Department of Gastroenterological and Pediatric Surgery,
Oita University Faculty of Medicine

I participated in the Kyushu Cancer Professional Training Program in Korea from October 30 to November 1, 2025, visiting Yonsei University Severance Hospital and Asan Medical Center, two of Korea's leading cancer centers.

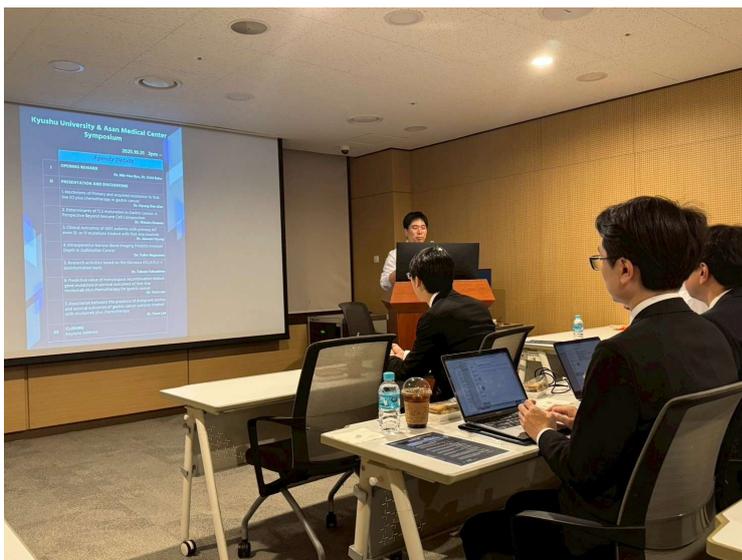
During our visit to Yonsei University Severance Hospital, we toured the entire facility and learned about its history and organizational structure. Established as the first modern medical institution in Korea, Severance Hospital has played a major role in advancing medicine both domestically and internationally. The hospital's systematic layout—with integrated cancer centers and research

buildings—demonstrated a strong connection between clinical care, research, and education.

At Asan Medical Center, we attended a symposium where Korean doctors presented the latest findings from clinical trials in gastric cancer. The Japanese delegation introduced basic and translational research conducted at their respective institutions, followed by active academic discussions.

We observed that medical resources in Korea are highly centralized in Seoul, allowing for efficient management of clinical and research activities in large institutions. This centralization enables large-scale clinical trials to be conducted within a short period, which we found impressive. In contrast, Japan's decentralized healthcare system allows patients to access surgery and chemotherapy even in regional areas, reflecting its broad accessibility to medical care.

Seeing peers of my generation working passionately across specialties and borders inspired me to further improve my own research and clinical skills. I am deeply grateful to Professors Eishi Baba, Sun-Young Rha, Min-Hee Ryu, and all members of the Cancer Professional Development Program for this valuable experience.



アサン医療センターにて Hyung-Don Kim 先生



Sun-Young Rha 先生と

今回琉球大学を代表して、令和 7 年度九州がんプロ韓国訪問研修に参加しました。長崎大学に在籍していた時代に、第一期がんプロに施設実習責任者として参画し、その時に実施された MD アンダーソンがんセンター(アメリカヒューストン)、そして延世大学附属セブランス病院(韓国)の海外研修に参加して以来の私個人として 3 回目となりました。

初日は延世大学附属セブランス病院を訪問し、施設見学しました。韓国はソウル、仁川などの首都圏に人口が集中しており医療資源の集約化が図られていますが、韓国を代表する中核病院として最新の医療技術が導入されており、その規模と整備されたシステムに圧倒されました。私個人として同院は 2 回目の訪問でしたが、前回に建設中であつたがん診療センターが完成し、活発に稼働している状況に感慨深いものがありました。research conference では、血液内科医である私が日頃接することが少ない消化器領域の最新の研究成果を伺い大変勉強になりました。特にビッグデータを基盤としたゲノム解析の成果や新規分子標的薬を用いた治療法開発の状況を知り、今後の自身の研究の進め方についてヒントをいただきました。

2 日目のアサン医療センターも韓国を代表する医療施設で、病院の規模もさることながら、research conference で拝聴した消化器領域のゲノム解析の成果は大変勉強になりました。同 conference では私自身の成人 T 細胞白血病・リンパ腫に関する研究成果を紹介しましたが、同疾患が殆ど存在していない韓国の研究者の皆様が発表内容に興味を抱いていただき、貴重なコメントをもらえたのは得難い機会でした。

2 日間とも両施設の先生方から交流会の場を設けていただき、大変美味しい食事とお酒とともに楽しい会話を楽しむことができました。皆様の素晴らしい hospitality に感激しました。また韓国の先生だけでなく、九州大学、長崎大学、大分大学の若い先生方と交流する貴重な機会となりました。皆さん頼もしく、これからの活躍を期待しております。最後になりましたが、貴重な機会を調整いただいた馬場先生、磯部先生に心より感謝申し上げます。



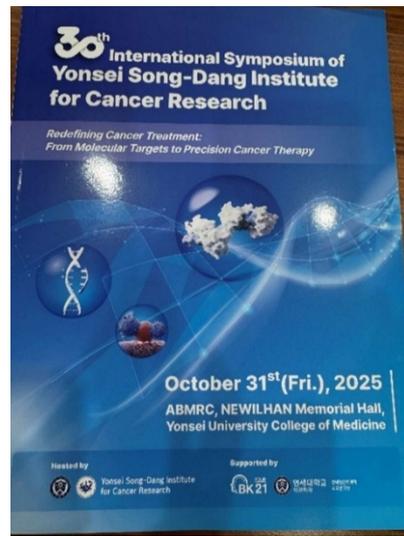
1日目延世大学にて 馬場英司先生



1日目延世大学にて 集合写真



2日目延世大学で開催されたシンポジウムに参加



2日目アサン医療センターにて 集合写真



文部科学省『次世代のがんプロフェッショナル養成プラン』採択事業
次世代の九州がんプロ養成プラン 令和 7 年度韓国訪問研修 実施報告書

編集・発行 令和 8(2026)年 2 月 九州がんプロ事務局
<http://www.k-ganpro.com/>

文部科学省『次世代のがんプロフェッショナル養成プラン』採択事業



次世代の九州がんプロ養成プラン

TRAINING PROGRAM FOR NEXT-GENERATION HEALTH PROFESSIONALS
WITH CANCER CARE IN KYUSHU

令和7年度 韓国訪問研修 実施報告書

発行 令和8（2026）年2月
編集・発行 九州大学大学院医学研究院 連携腫瘍学分野（九州がんプロ事務局）
ijsganpro@jimu.kyushu-u.ac.jp
<http://www.k-ganpro.com/>